座談会――分割前の地区の思い出を語る

愛知・長野分割前の
パストガバナー座談会（文中敬称略）

右から　森PG、奥谷PG、福田PG、田中PG

出席者　森　泰樹パストガバナー（1977～'78年度）
奥谷博俊パストガバナー（1984～'85年度）
福田浩三パストガバナー（1985～'86年度）
司会　田中　徹パストガバナー（1987～'88年度）

田中　今日お集まりの皆さまには各担当年度の思い出を順次お話ししていただきますが、まず森パストガバナー、先生が年度を務められたのは1977～78年度、昭和にしますと52～53年ということですが、この時に360地区から260地区に変更されました。それ以前のご経験のあるのは先生だけでございます。静岡や富山も一緒の時期でしたが、そのあたりのお話からいかがでしょうか。

森　正直言ってそのあたりは特に覚えていませんねえ。ただ地区大会で静岡に行ったことくらいですか。伊藤次郎左衛門さんのことは覚えております。

田中　私がこの260地区誌を見たところ、ガバナーとして、安野さん、近藤さん、佐藤さん、鮒谷さん、それから森パストガバナー、山田さん、田辺さん、川瀬さん、加藤さん、大隈さん、それから奥谷パストガバナー、福田パストガバナーと続くわけです。実は私の時に記念写真を撮っているのですが、12名中、ここにいる４名しか残っていないというのは寂しいかぎりです。（写真後掲）

森　「憎まれっ子、世にはばかる」ですか。(笑)

田中　森先生の時に地区大会が松本でありました。松本南クラブがホストで行われましたが、そのときの印象はいかがでしょう。

森　まじめ人間ばかりで一生懸命やりましたよ。リハーサルも前日の12時までやっていました。これは私個人の印象ですが、愛知と長野は隣同士にもかかわらず、空気というか、考え方がまるで違う。長野の人は非常に議論、討論好きなんですね。これはおもしろいと思いました。

田中　一番ご苦心をなさったことは。

森　やはり決議23-34ですね。普通アメリカではああいうことは問題にしない。日本人は非常に精神を重んじる人間だから、そこまで頑張るならおいておこうかということでした。同じような話ですが、ピカソ広場にある、ポールハリスが他の3人の仲間とともに初めて例会を開いた“ユニティビル”を1ドル献金で買ってロータリー記念館を建てようではないかと提案したら、日本人のノミニーは全員大賛成でしたが、アメリカの人はそんなことをして何になるんだと、一向に関心がなく私の提案は流れてしまいました。日本人と外国人との物の考え方の違いを、まざまざと見た思いがしました。

田中　23-34は奥谷年度で手続要覧から一度消えました。それから塚田年度で復活しました。

奥谷　その時の理事は菅野さんでした。それから韓国の呉在璋理事が非常に好意的で、お二人が頑張って再度復活したといういきさつがあります。私の年度の時、国際協議会のグループセッションの際に「23-34を討議する」ことも取り上げられました。

福田　規定審議会で23-34を廃止しようとしたのが'85年のシカゴでした。毎夜、街の寿司屋に集まって理事会の23-34に代わる提案をつぶそうと頑張りましてね、最終的には理事会が新提案をおろしました。つまり規定審議会が最高の議決機関であるのに、理事会の協議だけで23-34をマニュアルから抜いてしまっていたのですが、復活したのは日本の力です。

田中　そして私の前の塚田年度で復活したのですが、出てきたのがポリオプラスキャンペーン…。そこで私たちはロータリーの基本はクラブにあるのか、ＲＩにあるのか、毎晩激論を交わしたわけです。それから'92年のアナハイムの規定審議会に出席しまして、その時、藏並理事が日本語で提案をしました。それが社会奉仕の新方針でした。

森　これだけ日本が世界に貢献しているのに会長があまり出ていないというのはおかしな話です。

奥谷　日本での国際大会が過去に東京で二度行われましたが、二回目は森先生の時でございました。2004年には大阪に決まっています。それまでに日本から会長を出したいですね。

田中　森パストガバナーの時代は愛知と長野、一緒でございましたが、それなりに公式訪問の楽しみもございましたね。クラブ数は７７、会員数は4901名でしたが塚田年度の終りには101クラブ、6947名となりました。ちなみに分割の時は、愛知が60クラブ、4735名、長野が41クラブ、2212名でございました。

さて、奥谷パストガバナーの時代に移りますが、先生がご担当されたのは1984～'85年、昭和59～60年ですが、クラブ数は92、6299名でした。当時はいかがでございましたか。

奥谷　私の年度のこともちろんお話したいのですが、愛知・長野になってからの状態でご指導いただいたガバナーの先生方がたくさんいるわけですね。ですから、ここではあえてそれらの先生方のエピソードをご紹介したいのですが、森先生はもっとお詳しいので、ご追加していただければと思います。

では近藤友右衛門さんからお話しますが、この方はイギリスのジェントルマン的な雰囲気を持っていて、非常に温厚な方でした。ゴルフがお好きで亡くなるすぐ前までプレイをなさっていました。静かな中に、真のロータリアンらしい様相を持っていたという印象があります。

森　近藤さんは軽井沢を開発した先代を持ち、信州の友右衛門、“しなとも”と呼ばれていました。軽井沢の店は今でも近藤長屋と呼んでいます。

奥谷　次に小田切さんですが、私はあまり存じあげません。ただ、この座談会の前にマンスリーを集めて読んだのですが、ガリ版で小田切さん自らが作られていました。今から見ると（ガリ版という）非常に不完全なものでしたが、ご自身で随分とご苦心なさったという印象があります。

それから佐藤知雄先生。この方は名工大の学長で本多光太郎のお弟子さんでございます。育った環境が非常に厳しい方で、「日本人は“おしん”の心を忘れとる、ロータリアンはハングリー精神を持たねば」という名セリフは今でも忘れることはできません。本当に尊敬すべき立派な方でございます。

鮒谷さんはＧＳＥの最初のリーダーとして695地区（フロリダ）に行かれた方で、ロータリーを非常に信奉されて、やはり厳しいお方でした。特にR財団を立派なものにしたいとのことで、年間を通して寄付金データを収集して皆さんに配り、「君のところは数字がゼロだが、どうなっておるか」と聞くなど、最近では見られないような頑張りを見せた方でした。

山田市三郎さんは温厚な方でよくご指導をいただきましたが、やはり銀行にお勤めということでかたい感じ、非常に真面目という印象があります。山田さんは藤原さんが９月途中で病気入院された時に、多くのパストガバナーたちの中心になって穴を埋められ、蒲郡の地区大会を藤原さんに代わっておやりになられました。

それから森先生に移りますが、今いらっしゃるので非常に話しづらいのですが（笑）、おっしゃったお言葉で忘れられないものが二つあるのです。一つは「ロータリーの心は禅の精神である」ということ、もう一つは、ロータリーは“遊びであり、ゆとりである。”ということです。自動車のハンドルもこの遊びがあるから、楽に切れるし、毎日着ている着物も“ゆとり”があるからこそ、体が自在に動くのです。我々の日常生活もこの“ゆとりの心をもって大自然と融合して人生を楽しもうではありませんか”とおっしゃっていました。

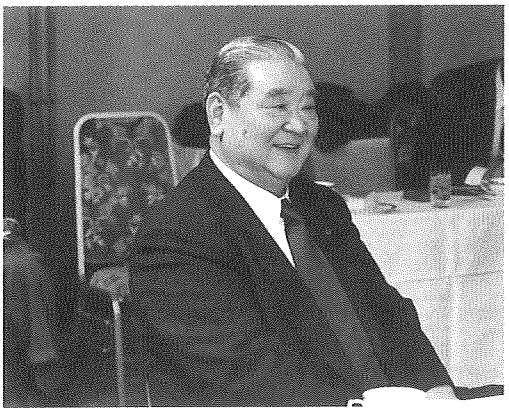
それから田辺さん、この方はＲＩのテーマが「リーチアウト」で、エーデルワイスの替

え歌を「リーチアウト」というタイトルにして、全クラブを訪問して歌わせ、採点するちょっと変わった厳しさを持ち合わせた方でした。

次に川瀬さんですが、この方も立派な方で、国際協議会会場に「学ぶために入ろう（enter to learn)」「奉仕の道を前進しよう（go force to serve)」という掲示があったと思います。私たちが国際協に行くと、この言葉が会場の入り口に掲げられているんですね。川瀬さんは、「地区協に義務者として出席してくる、しかし途中で帰る人もいる。それではだめなんだ。この二つの精神でやっていかなきゃ」とおっしゃいました。このことは私も非常に感動しております。それから川瀬さんは青少年奉仕活動にも強い信念を持っていらっしゃいました。

森　大隈さんは大隈鉄工のスリム化に成功した方で立派な方です。

田中　それでは公式訪問、その他ガバナーとしてのお仕事の中身はいかがでしたか。



奥谷　名古屋市内、尾張、三河とそれぞれ特徴がございました。どのクラブも個有の顔を持つというのでしょうか、まして信州は私にとって心を割って話のできる人が非常に多かったように思います。今でも愛知の方より長野の方からの年賀状が多いんですよ。白馬や軽井沢までマイカーを運転して行きましたから大変楽しい旅行でございました。そして私の地区大会では福田さんに委員長をやっていただき、マット・カパラス（次次期RI会長）が会長代理として来られましたので東ケ崎元RI会長を始め元理事の皆さんもお越しになって盛大に行われました。そこでロータリー発祥の当時をしのんで、マントにハットといういでたちで壇上にあがり喝采を浴びました。

田中　このころ長野は３分区でしたね、東北信、南信第一、南信第二と。どこが一番ご印象に残っていらっしゃいますか。

奥谷　やはり松本を中心にした南信第一が活発でした。愛知の５分区の中でいうと、三河の方が熱心で、豊橋地区はもう別扱い。ここは非常にまじめに活動していらっしゃいました。また、私の年度の時に、岡崎南クラブに意義ある業績賞を出しました。

田中　どうもありがとうございました。さて福田ガバナーの時代に移りますが、1985～'86年、昭和60～61年でございます。クラブ数は96、6611人の会員がおりました。この時、分割に関するアンケートをとっており、賛成が90、反対が２でございました。これらのことも踏まえてお話をお願いいたします。

福田　私が分区代理の時のガバナーはさきほど話にも出ました大隈ガバナーでしたが、この方はもうどこへ行っても分割、分割で、しきりに「小さな政府」を唱えていらっしゃいました。しかし、実行の方は難しかったように思われます。大隈さんが言われたことで印象に残っているのは、「長野へ行ったら、夜つきあっちゃいけないよ、のびちゃうから」ということですね。つまりそれだけクラブ数が多くて、回るだけでも疲れてしまうということなんです。

ノミニーで行った国際協議会のときにも言われましたが、当時クラブ数が愛知と長野で80を超えているから分割してはどうかと、これはRIの至上命令だと言うんですね。私は分区代理のとき尾張を二つの分区に分けた経験がございますので、分割の要領はわかっていました。結構簡単だとも思っていました。そうしたら諮問委員会に聞いたところ、「そんなことができるわけがない、長野は人口もクラブ数も少ないし、地区資金もない」と言わ

れるんです。それで実行はやはり難しいのかと思いました。

ちょうどナッシュビルの国際協議会に参加した時、当時ＲＩの会長エレクトだった整形外科医のエドガドマンと同席したんです。オプリランドホテルの喫茶室でした。私も英語が好きだったものですから、分割のことも話してみました。そうしたら「クラブが80以上なんて考えられない、すぐ地区分割すべきだ」と言われたのです。

国際協議会から帰り、公式訪問を始めました。始めの頃、諏訪クラブを訪問した時、藤原さんと三井さんにRI会長エレクトとの話をしたところ「そろそろかな」という。長野では、続けて訪問するために、毎夜の如く飲んでいるうちに分割の話になったものです、愛知と長野が分かれることを希望するのかと。そうしたら若い人たちは、ほぼ全員が「分かれた方がいい」と言うんですね、アンビシャスに燃えているとでも言うんでしょうか。

もともと愛知は長野に対して優越感を持っているというのか、長野のガバナーも諮問委員会に来ても、遠慮がちだったんですね。そういう伏線があったから、若い人たちから独立の声があがったのかもしれません。。前年、九州で分割した例があったので、資料を取り寄せたりもしてみました。もし分割するんであれば、年内にＲＩに申請しなければ２年後には間に合わない。そして長野のガバナーの時に分けなければいけないということで、10月の地区大会までにいろんな意見を聞いて回りました。そしてその地区大会の会長幹事会でボタンを押すアナライザー方式で意見を伺ったところ、長野の７割以上が賛成でした。まだ公式訪問が終わってないこの時期にこれだけの回答が出たので自信を持ち、全クラブに正式のアンケートを送り、出してもらった結果が賛成90ということでした。

長野の八十八銀行の頭取、黒澤さんのご意見も「そろそろやるべきでしょう」とのことで、これがダメ押しでしたね。12月に京都で行われたロータリー研究会の時、諮問委員会を開いてＲＩに出す正式な申請書にＧＯサインが出たわけです。

そんなわけで分割が進んでいったわけですが、翌年度の塚田ガバナー、この方は立派な方でした。華奢な体ですが、柔道七段で芯が強い。分割準備年度に本当にお骨折りをいただきました。それからの長野はすばらしく発展されました。

奥谷　先程言い忘れました安野さんですね、この方は戦後のロータリー活動に大きな役割を果たされました。1971年、シドニーで行われた国際大会のＳＡＡになられ、エリザベス女王の先導をなさいました。また国際協議会のグループリーダーも２回務められました。この安野さんの言葉で印象に残っているのは「さおで星を落とすような目立つことはしなくてもいい、足下の小石を一つづつ拾うような地味なことを、各人がみなやっていけばいいんだ」というものですね。

田中　ありがとうございました。様々な地区分割の秘話が出てまいりました。その後塚田年度に入りまして、分割のための委員会が設けられました。万国旗などの財産をどう分けるかなどが話し合われました。そして私の年度に入りまして、新しい地区が始まったわけであります。60クラブで4735名という数でした。当時は財団のお金の分配などで大いにもめましたが、何とか事無きを得て今に至っているわけであります。

さてここまで各先輩ガバナーの担当年度の秘話を拝聴することができました。これからは分割してからの十年間をざっくばらんに語っていただけたらと思います。一つだけご提

唱申し上げたいのが、'89年にＩＧＦからＩＭに変わりましたね。それで最近は「ロータリーを楽しもう」的な雰囲気になっておりますが、その辺はいかがでしょうか。

奥谷　IGFがＩＭに代わった頃から地区大会の経費が倍増し、23－34の理念も「エンジョイ・ロータリー」というテーマが発表されてから奉仕の在り方が薄れてきているのでは、という気がします。

各分区で行っているＩＭもミニ地区大会のような感じです。お金だけたくさんかけて、「エンジョイ・ロータリー」というのは物質的なものではなく、本当はスピリット(奉仕活動)のエンジョイなんですね。

諮問委員会も最近は非常に民主的でよろしいんですが、ただ意見を聞くだけ。私たちの時はよく先輩から強い指導を受けました。一人一人のロータリアンの理念が薄らぎかけているんじゃないかと思うわけです。私はもっと精神的なものを取り上げたい。例えばバブルが崩壊して職業倫理というものをどうしてもっと取り上げないのかと思いますね。ロータリアンがもっと率先して取り上げなければならない。そうしなければ21世紀の日本は存在しないのじゃないかと心配しています。

田中　確かにおっしゃるとおりです。23－34の時にもそういう危機がありました。時代の流れ、要請が物質主義にきているということもあろうかと思います。私の時にポリオプラスのお金を集めるということで、目標40億。これは激論を戦わせました。ロータリーの基本は「アイサーブ」にあるのか「ウイサーブ」にあるのか、と。結局、日本選出の理事も関与してＲＩで決めたことだから文句言うなと、まとめていましたが……。ただ各クラブにどう説明しようかと……。

福田　「アイサーブ」「ウイサーブ」は私も考えました。ただポリオプラスは日本ロータリーを世界に広めるのにいいチャンスでした。アイサーブじゃないとおっしゃる方もいましたが、自分がワクチンを運べないから運んでいただける人にお金を出す、結局アイサーブだと思うんです。自分ではこう納得して説明していました。ライオンズが非常に熱心にやっており、世間は比較しますからそういう意味でポリオプラスはよかったと思います。

田中　それからもう一つの問題で'89～'90年度の7月に、女性会員の入会が正式に認められました。現在では65名、日本全体では1580名でございます。やはりそろそろ門戸を開かねばということで、相当議論がありましたね。

奥谷　私が、出席したシンガポールの規定審議会で会員は、adult　menがpersonsに代わりました。

福田　これは各クラブが考えればいいことであって、よそが入れたからうちも、という必要はないと思います。

田中　次に95－20（メイクアップ規定の変更）のとき、高沢さんがベネズエラのカラカスで行われた規定審議会に出席されました。この時、メイクアップの期間が前後二週間に延長されました。

福田　これを嘆かわしいと見るか、よしと見るか、非常に有能で多忙な方もいらっしゃるので、私は提案された方の勇気をたたえたいですね。

田中　さて最後に現在のクラブのあり方、地区のあり方、ロータリーのあり方についてご意見、ご提言がございましたらお願いします。

福田　長野が分割して発展したように、クラブを拡大すれば結局地区分割が必要となるることになり、増強発展するけれども、ＲＩの費用が増えてしまう、こうした矛盾ですね。女性も入り、いったいどこまで増強するかを考え直す時期がきているのではないでしょうか。

奥谷　2005年までに会員数200万人というＲＩの要請があります。それに向かって増強していきたいと言っていますが、そういうことはいかがでしょうか。

それと何と言っても行動をおこさないと意味がないですよ。テーマがしっかり議論されていないし、下から意見が上がってこないから、上からの話を聞くだけ、これじゃダメです。職場見学がありますが、見て回るだけではただの見学で終わってしまう。そこで研修して、いわゆる職業倫理についてのディスカッションがあってもいい。

田中　それはリーダーが不在ということも言えるのではないでしょうか。

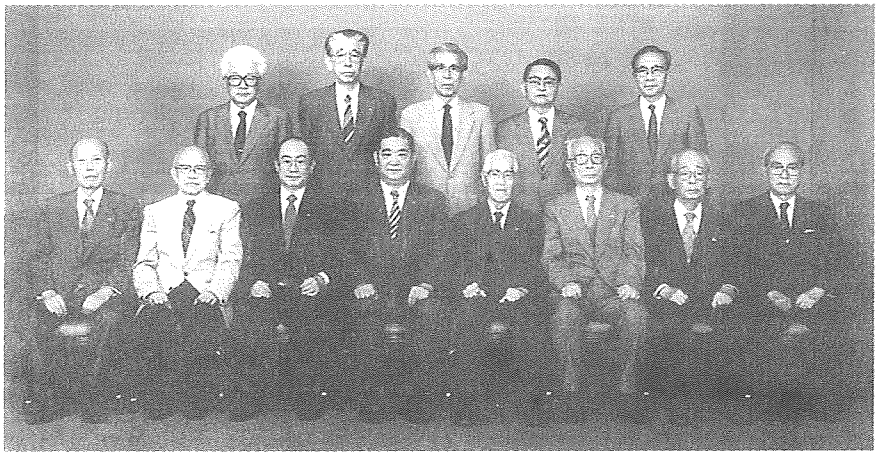
奥谷　いいえ、行動は各人でおこさないとダメなんです。一人一人のロータリアンが考えればどんなことでもできるんですね。日常生活での環境保全もそうです。実際は行動していないように思います。

田中　なるほど、よくわかりました。どうもありがとうございました。最後に最古参のパストガバナー、森先生からお言葉を一つ頂戴できますか。

森　そうですね、最後に、ですか。では今日のこの対談を堅苦しいものでなく、おもしろおかしく編集してもらいたいですね(笑)。

一同　どうもありがとうございました。

分割初年度の諮問委員会メンバー



後列　左より　福田浩三PG、大隈孝一PG、加藤直一郎PG、奥谷博俊PG、高沢　隆GN
前列　左より　川瀬　保PG、安野譲次PG、塚田和男PG、田中　徹G、近藤友右衛門PG、佐藤知雄PG、鮒谷賢太郎PG、森　泰樹PG

1987.7撮影